



陽気は幸せの種

陽気だより

No.79

2013.10.15

●ホームページからも「陽気だより」

最新号・バックナンバーをご覧くださいませ

<http://yotokusha.com/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

昭和29年5月号
昭和30年1月号

から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で64年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

今こそ、鯨になれ

上田嘉成

「今こそ、鯨になれ」

特に最近愛用の座右の銘が、これである。といっても、むやみやたらに暴れようというのではない。理を立てる、親を立てる、という上には鯨以上の勢いで、元気に働かせて頂こうという意味である。

わずか二十五、六尺の鯨が、十二、三尾も突っ込んでいくと、十倍もある鯨が三、四百

頭おつても、慌てふためいて通走してしまう。それは何故か。この鯨がどれを狙うか知れぬが、ただ一頭の鯨に迫る捨て身の集中攻撃を恐れての話である。

過ぐる昭和十四年十二月二十四日未明、私は中支において、蒋介石の冬季攻撃を迎えた。前線に出ている二百の友軍は、二千を超える敵のために包囲されて、命運まさに風前の灯であった。しかも、この救援に出されたのは、僅々十数名の小隊二と重機一であった。

この時に、十七名の一隊を率いて私の突撃した山は、その戦場の最大の要点。しかも敵七または八名と判断した山は、実に三、四百の敵によって占領されていた。我々の斬り込んで行ったところは、実は敵が重機を据えて待ち受けていた正面である。

「小隊長、敵が見えます」という清水軍曹の一言に、「突っ込め」とばかり、鞘を捨てて斬り込んだ時、敵は一発も打たず、安全装置さえも外さずに逃げてしまい、さて後、手榴弾を発火させて投げ返してきた。

そのため私に続く三名はことごとく足に負傷して、その後は匍うて突撃したのであるが、これが端緒となって首尾よく友軍は救援され、十倍に余る敵は、間もなくことごとく追っ払ってしまった。

夜が明けて、潮の退くが如く退却してゆく敵の中から、ただ二人の戦友が我々の陣地に引き揚げてきて、「本当に命拾いをした」と言って喜んでくれた嬉しさは、今でも忘れられない。

斬ると斬られるとは、紙一重であるというが、白兵と火

器の戦いもまた紙一重である。生と死は正しくかくの如くであると思う。

この話を私は武勇伝としてではなしに、霊救談として思い出す。かしの・かりものの実例として思い出すのである。命を捨ててかかって、親神様が、まだ貸しておくに仰せになったら、死ぬわけにはゆかぬ。死にたくないと思っても、返さねばならぬ時には返すのである。要は、ただ人の真心である。一切を捨てて、衆心一致一手一つの努力を一点にたたきつけるところに、たとい敵が三百おろうと四百おろうと、四人が斬り込んだ正面には銃剣兵が一名か二名しかいなかったのである。ここが天の配剤である。

しかも、鯨になるべき時は、人間思案で言うならば、全く驚愕狼狽の時に来る。容易ならざる艱難の時に来る。これもまた天の摂理であると思う。これを心のふしんと仰せ下さるのであって、このような時こそ、一に勢い、二に元氣、末代までの徳を伏せ込ませて頂く絶好の時句であると私は信じる。

(昭和三十年一月号) (昭和三十年当年 本部長)



陽気ぐらしの道 —七十年祭へのめど—

常岡一郎

いつまで しんぐく したとて
やうき づくめで あるほどに
いつも たすけが せくからに
はやく やうきに なりてこい

信仰の目標はやうき世界の建設である。人間をつくられた親神様の思召は、人間のよき、ぐらしを見たいため、だと教えられている。

幾たび年祭が来ても、信仰の本質はまげられるものではない。むしろ、この本質を一つ一つ築き上げていくのが年祭の意味だと思ふ。

陽気ぐらしというのは非常に深い意味があることと思ふ。しかし、その一つは心の明るく伸びきった心と思ふ。万歳！ と両手両足を思いきり伸ばした姿、これが陽気の一つの姿である。

つとめきる、つくしきる、そうして何も求めず、一切を許しきった姿である。イライラしたり、ガミガミ言ったりあわてたり、何でも求めたりするところに陽気はない。

ふしぎなふしんをする。しかし誰にたのみはかけまい。みなせかいがより合せて、でけたち来る。これが不思議だと教えられている。

七十年祭。おぢばの拡張、これが陽気心。つくしきるつとめの悦びの集まりであつてこそ尊い。ありがたい。もつたない。この心の表れとして出来たち来る。ああ聖いかな、美しいかなと仰ぎみられるものでありたい。

上の方の人々。教えの指導者もつくしきる。しかし部下に対しては明るく、にこにこしている。下の方の人々、部下先々の教会長、教師、信徒は歯をくいしばってつくしきり、働ききっている。報恩の願望にもえている。これが、

わが心のふしんの出来る途ではあるまいか。しんどうの中にみがある、楽々の中にみはない、と教えられている。真実の種をまきつけていく時は歯もくいしばる。汗も流す。しかし、一切のつとめを果たし、真実を伏せ込んだ後にわく心のゆとり、安心、落ちつき。これが陽気の生まれる根源ではあるまいか。

つとめを果たさず楽々の中のんびりとしていることは、真実の生活でもなく陽気への道でもない。上下の差なく、一人一人の胸に本当の陽気の生まれ出る道を歩きつづけることが七十年祭への道ではないかと思ふ。(昭和二十九年五月号) (昭和三十年当時 鎮西大教会五代会長)

『陽気』定期購読

お 店で買いにいくのが大変。忙しくて購入し忘れた。

定期購読はそんな手間を省きます。毎月20日前後にご自宅宛に発送いたします。

(例：11月号は10月20日) まずはお問い合わせください。



購読料金

1年分…3,200円 (12回分の送料込)

購読に関する問合せ先

☎0120-920-398 養徳社 業務部窓口

特集 感謝

モノに囲まれた現代こそ大切にしたい感謝の心

<執筆予定者>

森谷弥右衛門
(眞名清分教会後継者)

井戸 勇
(天心布教所長)

松浦茂生
(道松分教会会長)

栗林みち代
(天理よろづ相談所 病院主幹看護師)

高橋道嗣
(香取分教会会長)

かしまの・かりもの(二) 加藤 道義
話 医 者

がんと緩和ケア3 久須美房子
がんの病期と治療方針

悩み相談室
「次々と身上事情が重なって」
宮坂政男 (南泰分教会前会長)

お道の家庭雑誌・幸せの種

陽気

平成25年12月号 11月20日発売 定価200円(税込)

人間が たすかる原理

中臺勘治著

定価 1,365円(税込) 送料 200円

※ご注文は前払いとなりますので定価に送料を加算して郵便振替にてご注文下さい。
図書出版養徳社 業務部窓口 ☎0120-920-398

Facebook で最新情報をチェック! <https://www.facebook.com/yotokusha>

<書籍・陽気のご購入方法について>前払いをお願いしております。お近くのゆうちょ銀行に備え付けの振込用紙をお使い頂き、[住所、氏名、電話番号、書名(陽気希望月号)、冊数]を明記の上(振替口座番号00990-3-17694番 加入者名 養徳社)へご送金ください。手数料はお客様負担となります。ご入金を確認後、速やかに商品を発送させていただきます。ご不明な点は養徳社までお問い合わせ下さい。フリーダイヤル0120-920-398 養徳社 業務部